五才児雑感

村井トミ

昨年の今頃のこと——

あの、よちよちしていた三才児が、またはこの間入園したと思った四才児が、いよいよ幼稚園の最年長組になった！　思えば、短くもあり、長くもあった二年、または一年であったが、幼稚園生活の最後の年となると何か心がときめき、希望があふれ、充実した生活をさせなくてはと、私もまた子どもと共に、新しいよろこびと情熱に顔を輝かせたことを思い出す——

年長組ともなると、子どもも、ぐんぐんと発達していくのが見える。過去二年、または一年の間経験してきた生活の上に、がっちりしたものが建てられていく感じである。走るにしても、とぶにしても、話すにしても、何をするにも、こちらも真剣にかからなければ負けそうな気がする。やりがいのある楽しさを感じさせる。それだけに、こちらもどういう指導をしたらよいかと責任を感じる。充実した生活を充分にさせてあげなくては——、幼稚園生活のまとめをしてあげなくては—と。

三才は三才なりに、四才は四才なりに、私の「ねらい」があった。「ねらい」というより「ねがい」ということばの方が適切かもしれなかったが——、私は五才のこの子たちに対する「私のねがい」を、次のようなことにしぼってみた。

○よく考え、よく工夫し、積極的にやってみる。

○友だちと協力して、たのしく仕事や、あそびができる。

○年長児らしく、優しい気持と責任感がもてる。

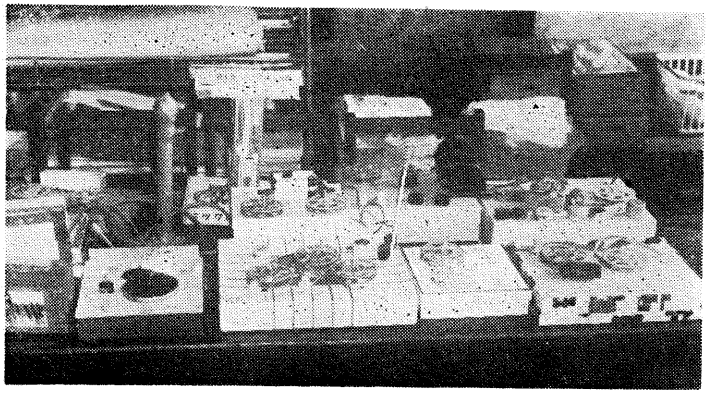
この三つのことと前後して、私としては一人ひとりの子どもをよく見つめて、一人ひとりをしっかりと指導していこうと決心した。

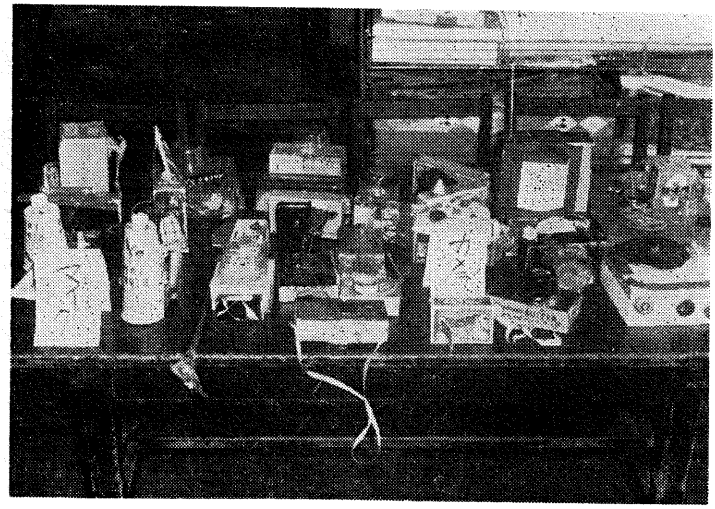
ここにあげた三つも、こうして書きならべてみると、たわいもないようだが、入園してから現在に至るまでのいろいろなこと——一人ひとりが充分にあそべることからはじまって、友だちと仲よく・自分のことはできるだけ自分で・素直に何でも言える・心から人の話をきける・何でも一生懸命にする・約束は守るなどの、土台の上におかれたものであり、また更にこれからも平行していかなければならないものでもあるのである。

年長組になったといっても、まだまだけんかも起ったし、女の子など友だちのより好みで、入れてあげたりあげなかったり、ままごとなど発展する程、道具の分配が問題をひき起したりであった。一人ひとりみつめると、臆病の子や、わがまま、いたずら、落ちつかないなど、いろいろと問題はいくらでもころがってきた。私は、その場その場に応じて、できるだけ、子どもの立場も理解して、その上での指導であるよう、努力してきた。

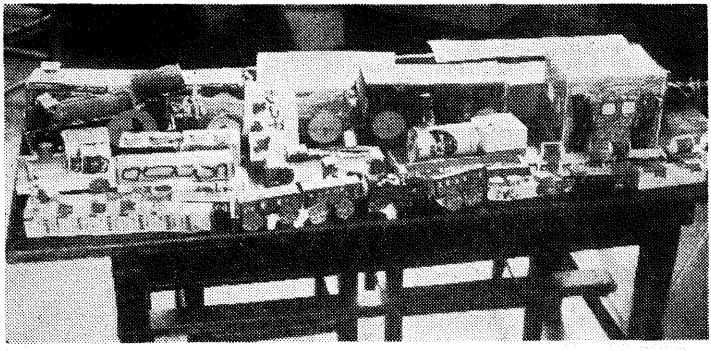
しかし、日が加わるにつれて、子どもたちは次第によく協力してあそべるようになって

いった。年長になった自覚と、つみ重ねられた経験とで次第にたのもしくなってきた。かっては一人ひとりが、おだんごをつくっていた砂場など、大勢が力を合わせて、砂場全体を使って一つのものをつくったりして、私をよろこばせた。





「**展らん会ごっこ**」も計画した。展らん会ごっこといっても、いわば廃物利用展のようなものである。空箱、ビンのキルク、ふた、ひも、布、毛糸、針金、牛乳のふた、缶、ストロー、フィルムの空リル、ホース、木片、スポンジ、など書きあげたら、きりがないが子どもたちも毎日のように何か探して、家から持ちよってきた。不要品の中にも、思いがけぬ程、たくさんに使えるものが見つかった。それぞれ小箱に分類し、いつでも自由に使えるように棚に整理しておいた。子どもたちは分類された材料をいじっている中に、その形や色からもしげきされて、いろいろと考えてくれた。おとなが考えつかないようなことを考えたりもした。こんな時、心から驚ろく先生を、子どもはいかにもうれしそうに見たことだろう。ちょっとした思いつきや、おもしろいものができた時は、とりあげてほめてあげると、たしかに、いいしげきとなった。困っている時は手をかしたり相談にものった。次々にでき上っていくものを集めて机に並べると、またまたつくる意慾も出てくるようだった。陸、海、空のいろいろの乗りものや、テープレコード、電蓄、マイク、カメラのような機械類、いろいろな人形の類、台所セットやポスト、かばんに至るまで各種。



分類して会場にならべ、母親や、他の組の友だちなど入場券をもって見に来てもらった。子どもたちはたいへんな張り切りようであった。テープレコードの所など、声を録音してくれる。係の子どもが、机の下にかくれて、今と同じことばや歌を再生してくれるのだった。年入った先生の声が若がえって聞こえるといって皆で大笑いした。それにもましておどろいたのは、特に男の子が、機械をよく見ているという事だった。もっと意図的に、こういう面をとり入れるべきだと思った。

テープレコードの話が出たが、これを使ってもよくあそんだ。私は子どもと「お話つなぎ」という名をつけているのだが、一人が言ったことばに、順々に一言ずつ、つけ加えて、一つのお話をつくっていく。これをテープに入れておいて、あとでかけてみる。大ていの子どもはよろこんだ。はじめは何人かの子どもの所へいくと、テープが空で廻ることもよくあったが、次第に自由に、想像し、考えて一つの新しい話をつけ加えていけるようになった。いろいろの話ができ上り、そのたびごとに皆でドッと笑ったりしたこともたびたびであった。

秋も半ばになると、子どもたちは一層成長した感を深めた。友だち関係も巾が広くなり、あそびや仕事によって、グループのメンバーの数もふえて、がっちりしたものになってきた。グループでつくる紙芝居やペープサートにも協力のたのしさを味ってくれたと思う。いわゆる問題児として私を悩ませつづけてきた三、四人の子どもも、この頃になると、人目にも目立って「よくなった」と言われるように成長してきてくれ、こんなに嬉し

いことはなかった。

三学期は何といっても、ひなまつりが、指導のいい場であった。私の園の恒例により、ひなまつりは年長組の二組で、司会まで子どもが受けもって、一切をすることになっている。自分たちの母親や、年中、年少の組をたのしませるために、劇やベープサートや、リズムあそび、合奏などを、いろいろと計画した。本当に組中が一がんとなって、一つの目的に向かっていった感であった。希望の役になり、子どもと先生が一つになって協力してつくっていった劇、自分の思ったこと、言いたいことを堂々といえる、一人ひとりが、これなら大丈夫——と、子どもに対して信頼がもてるようになっていた。また感心したことは、皆の劇ということで、適役を子ども同志で、推せんすることだった。子どもにとっては、必ずしも主役がいい役とは言えないようだ。そしてその推せんも、子どもの眼が高いことに、またまたおどろかされた。

年長組らしい気持や責任は、自分たちの組だけのことでなく、淡いながら、幼稚園全体のことを考える気持、例えば共同のあそび場のかたづけ、ゆうぎ室の共用の大積木や、誰が散らかしたのか、いっぱいにちらかされた畳の室の玩具のかたづけなど、一日の終りには必ずきれいにかたづけた。年長児らしい責任感と自覚をもつには、適当なしごとであったし、これはとてもよかったと思う。

その一年もいつの間にか過ぎて、つい先日一人ひとりが、園長から渡される証書を、しっかりと受けて、立派に卒業していった。ああ、立派になってくれた！　と、しみじみ嬉しく思ったことだったが、それだけに、私はこの一年に、果してどれだけのことを、あの

子どもたちにしてあげられたか？　と、そっと考えてみる。何か恐ろしいような気がする。まだまだやり足りないと思う。大事なことが、ぬけてしまったのではないかしら？　と思う。たのしくたのしくあそべて本当によかったとも思う。あの時怒らなければよかったとも思う。ずいぶん苦労もさせられたし、何とかわいいのだろうと思うこともあった。なやみつづけていた子どもが良くなって、教師の道をえらんだ喜びをしみじみ感じたこともあったし――いろいろの気持が入り交って、あの子どもたちをもう一度この胸に呼び集めて、しっかりと抱いてやりたいような気持！　そんな今日、この頃である。

卒業間近の頃に、心の底から言っている子どもたちのことば「もっともっと、幼稚園にいたい。飽きるまでいたい。先生とまた、いろいろのことできるもの」「あーあ、とうとう卒業か、つまらないな―」「日曜日なんかない方がいい！　そうすれば幼稚園にこられるもん」……何とかわいいことを言うのだろう。こんなにも幼稚園をたのしんでくれたのかと、今更のようにこちらが、感謝したいような気持である。そして、こういうことばの一つ一つに、ほのぼのとした温かさを感じ、これでよかった、よかったと思うことであった。

二月の頃であろうか、女の子たちが、ころこそと何かやり出した。「先生見ちゃだめよ」と大事そうに箱を抱えている。リボンがなくなったり、錐がなくなったりした。「先生お部屋のどこかに、かくしておくから見ないでね。先生のおたのしみだからね。」私はいっしょうけんめいに見ない努力をした。黒板と棚の狭い間に箱はかくされたり、毎日持ち出されたりしていた。私にとっては一日でもこの気持はうれしかったのだが……。この年令の子どもたちだもの、幾日つづくかしら？　と思った。でもそれは続いた。そして卒業式の朝、ちゃんとプレゼントしてくれたのだった。白い箱にたくさんの穴をあけて、色とりどりの薄いリボンで結び、きれいに飾ってあった。中にはいっしょうけんめいつくったらしい首かざり、腕わ、かみかざり、指わなどが入っていた。協力してつくった人の名前まで、ちゃんと書き連ねてあった。女の子らしい優しい気持に、私はうれしくて、一つひとつ飾ったり、はめたりしてみせた。

卒業してから二日後に、また私はうれしい話を母親たちから聞いた。実現はしなかったが、男の子たちが女の子たちのそれに対して、先生に何をあげようかと相談し、幼稚園の庭中から美しい石を探して、磨いて、それを先生にプレゼントしようと計画したのだそうだ。こっそりとためていたら、或る日どうしたのか、なくなってしまったのだそうだ。本当にがっかりしたとのことだ。今だに子どもは一言もこれについて言わない。男の子らしいと思った。思えば或る日、二人の男の子が「先生にあげる―」と、小さいけれど水色のきれいな石をくれた。幼稚園の庭で見つけたのだそうだ。ありがたく頂だいし、子どもも嬉しそうだったが、今思えば、あの頃からのことだったに違いない。

友だちと相談して、しかも自発的に、こんなことまでできるようになったのだ、しかも男の子たちまでが……と思うと、本当によくここまで成長してくれたと、しみじみ思うのである。

＊　＊　＊